

幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究 (4)

—情動発達と ASD 傾向との関連—

○高橋千枝 (東北学院大学)
飯島典子 (宮城教育大学)

本郷一夫 (東北大学)
平川久美子 (石巻専修大学)

キーワード：情動発達，行動特徴，幼児

問題と目的

本研究は，幼児期から児童期における情動発達のアセスメント・スケールを開発することを目的とした研究の一部である。本報告では，研究 2 で抽出された幼児の行動特徴と情動発達との関連を明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 調査対象：研究 1 に同じ。
2. 調査時期：研究 1 に同じ。
3. 調査内容：(1) 情動発達：研究 1 に同じ。
(2) 行動特性：研究 1 に同じ。このうち本報告では研究 2 で抽出された 2 つの因子(【ADHD 傾向】【ASD 傾向】)のうち，ASD 傾向の行動特徴を示す幼児の情動発達について検討した。ASD 傾向で抽出された 6 項目の行動特徴の平均得点が 3 以上の幼児を高群 (N=54)，3 未満の幼児を低群 (N=1014) として群分けし検討した。

結果と考察

情動発達の領域別得点において ASD 傾向の高群と低群との差を検討するために t 検定を行った。その

結果<表現(表情)>以外の 6 領域において統計的に有意な差がみられた。さらに 7 領域の情動発達項目(20 項目)において項目別に t 検定を行った結果、<表現(表情)>の「怒っていることを表情で表現する」「悲しんでいることを表情で表現する」以外の項目において統計的に有意な差がみられた (Table 1)。項目別にみると<理解>と<共感>の領域の項目の差が大きく、<抑制>の領域では否定的な情動の抑制に関する項目の差が大きかった。

以上のことから，ASD 傾向の高い幼児は他者の情動を理解することや他者の情動に共感することに難しさを持つことが明らかとなった。また肯定的な情動を表現することが難しい一方で，否定的な情動は抑えることが難しい傾向にあることも示唆された。

付 記

なお，本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B)「幼児期・児童期の情動発達アセスメント・スケールの開発と保育・教育への応用」(研究代表：本郷一夫)の助成を受けて行われた。

Table 1 項目別得点

領域	項目	ASD 傾向 高群(A)	ASD 傾向 低群(B)	A-B	t 値
表現 (表情)	E1 喜んでいることを表情で表現する	4.11	4.40	-0.29	2.95**
	E2 怒っていることを表情で表現する	3.91	3.93	-0.02	0.13
	E3 悲しんでいることを表情で表現する	4.00	4.06	-0.06	0.49
表現 (言葉)	E4 喜んでいることを言葉で表現する	3.67	4.25	-0.58	5.06***
	E5 怒っていることを言葉で表現する	3.39	3.78	-0.39	2.57**
	E6 悲しんでいることを言葉で表現する	3.24	3.68	-0.44	2.95**
抑制	E7 うれしい気持ちを抑える	2.09	2.38	-0.29	2.09*
	E8 怒っている気持ちを抑える	2.19	2.75	-0.56	4.33***
	E9 悲しい気持ちを抑える	2.28	2.78	-0.50	4.06***
誇り・恥	E10 自分ができていることに誇りをもっている	3.50	4.11	-0.61	5.13***
	E11 自分ができないことを恥じている	3.11	3.45	-0.34	2.45*
理解	E12 友だちのうれしい気持ちがわかる	3.43	4.02	-0.59	5.52***
	E13 友だちの怒っている気持ちがわかる	3.17	3.84	-0.67	5.72***
	E14 友だちの悲しい気持ちがわかる	3.13	3.81	-0.68	5.73***
共感	E15 友だちのうれしい気持ちを自分のことのように感じる	2.96	3.57	-0.61	4.35***
	E16 友だちの怒っている気持ちを自分のことのように感じる	2.54	3.10	-0.56	4.45***
	E17 友だちの悲しい気持ちを自分のことのように感じる	2.57	3.18	-0.61	4.48***
過敏さ	E18 ちょっとしたことでも怖がる	3.09	2.64	0.45	2.50*
	E19 ちょっとしたことでも嫌な顔をする	3.35	2.66	0.69	4.43***
	E20 ちょっとしたことでも驚く	3.04	2.50	0.54	3.38**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$